



蟻を飼っていたことがある。小学生の夏休みなのだ。よくある昆虫観察キットのようなもので、側面から巣の全貌が眺められた。

上から餌を与えると、たくさんの蟻が規則正しく巣に回収していった。忙しく動く蟻は、すべて同じ色で同じ形で、一つの大きな生命のようにも見えた。その姿に、どうしてか変な恐怖心が芽生え、私はカゴを掴むと庭に全てぶちまけてしまった。

ある日、学校の中庭に座って昼食をとっていた。ふと顔をあげると、教室がある校舎が見えた。一階から三階まで窓が散りばめられそこには生徒が忙しなく動いている姿が映っている。同じ制服を着て、蠢くさまはさながら蟻のようだった。私は、その時なんとなくあの恐怖心の理由がわかったような気がする。

昔から人と同じ事をするのが耐えられなかった。中学校に上がった時、制服というものに長いこと馴染めなかった。今も上手く馴染めてはいない気はする。とにかく、集団と同じ行動をとるというのに、いつも嫌悪が胸のうちでモヤモヤと渦巻くのだ。体育の時間なんかは特に顕著で、準備運動をやるとうるとどうしても吐き気が止まらない。だから、いつも見学していた。そういう訳で、当然教室でじつと皆と同じ姿勢で授業を受けることもできない。いつも教師の話は聞かずに独学で勉強を進めていた。他の生徒と同じ行動をしていない、という点でどうにか精神を保てた。幸いにも、成績だけはよかった。しかし、その様な態度で望んでいれ

ば当然、通知表の成績はよくない。

ある日、教師に呼び出され、説教をされた。内容は、協調性が足りないのだ、集団生活に適していないのだ、といったものである。そんなことは百も承知である。次の日、私は学校を辞めた。後から聞いた話によると、説教程度と辞めるなんて、と囁かれていたらしいが、捉え方が間違っている。教師から説教を受けたからではなく、今までの蓄積が今回の件でまたま溢れたというだけだ。きっかけはきっかけに過ぎず、本質的なところはもっと別の部分にある。そして、学校を辞めてからというものの、私は荒れた。犯罪まがいのことを繰り返し、金を稼いだ。ピカレスクロマンで見た悪漢たちは、社会に束縛されず、自由に振る舞っていた。それに傾倒していた私は、これこそが自由だと感じていた。ここに、私の自由があったのだ。この手の才能があったのか、私はアウトローの界隈で、そこそこ顔が知れる存在となった。そんな日々を過ごしていると、その筋の人間からスカウトを持ちかけられた。調子に乗っていた私は、それを快く承諾した。暴力の先に、完全な自由があると思った。が、私が想像していたものなど、そこには微塵も存在していなかった。代わりにあったものは、昔の生活以上に厳しい規律と同調性だった。限界に達した私は、上の者に抜きたいと申し出たところ、外に連れて行かれ、殴られた。地面に転がった。空を仰ぐと、小鳥が飛んでいた。どこで、間違えたのだろう。私は、あの小鳥のように自由になりたかっただけなのだ。靴底が見え、意識が途絶えた。

目が覚めると、私は学校の中庭にいた。昼休みに、どうやら、長いこと夢を見ていたようだ。午後の授業を受けねばならない。私は急いで教室に戻った。

その日の放課後、教師から呼び出しを受け、説教を受けた。内容は、協調性が足りないだの、集団行動が出来ていないだの、といったことで、百も承知である。学校でも辞めてやろうかとか考えたが、思いとどまった。それよりも、勉強で、この教師を見返してやろうと思った。偉くなくて、権力を持てば、誰にも束縛されないと感じた。それから、一層勉強に励んだ。元より、勉強は嫌いな性質ではない。寧ろ、没頭している間は、束縛を忘れられたので、好きと言っていかもしれない。この手の才能があったのか、成績は伸び、無事に難関大学である、×大学に進学が決まった。大学でも、勉強に励み、有名企業の内定を手に入れた。権力の先にある自由を追いかけ、三十代間近になると、私は独立を果たした。事業は順調に進み、一代で大手企業と肩を並べるほどに成長した。何百人と部下を抱えるトップに立ち、圧倒的な権力を持った。それで、しがらみが多くなった。私の行動ひとつで、あらゆる人間に影響が起きる。下手なことは、できない。そう、しがらみだ。何故だ、自由はどこだ。積まれた、権力が、私を。息苦しさが、全身を襲った。思わず窓を開ける。小鳥が飛んでいた。なぜ、あの小鳥のように私は飛べない。これでは、だめなのか。私は、窓から飛び降りた。

目が覚めると、家のベッドにいた。長い夢を見ていた。最近、長い夢を見ることが多い気がする。何の夢を見ていたか、詳しくが思い出せない。しかし、変な時間帯に目が覚めてしまった。あと一時間もすれば、学校に行く準備をしなくてはいけない時間なのだが、今はもう気にする必要はない。私は、ここしばらく、ずっと学校を休んでいた。教師から説教を受け、なにももってしても、社会に共存する事に限界を感じたからだ。こんな性格であるなら、いつ社会という組織から孤立しても可笑しくなかったのだ。しかし、完全にそれを出来るほど私は強くない。親に食べさせてもらい、経済的循環に所属して、社会に生きねばあっさりと死んでしまう。私は、部屋に籠り、何もせず、閉鎖的な空間で最低限の食事を摂り、惰眠を貪っていた。こうしたところで、結局社会の輪から飛び出せないのだ。小鳥の声がした。窓に小鳥がいた。じつと眺めていると、徐々に眠気が襲ってきて、私は眠りについた。

目が覚めると、辺りは暗く、夜だった。ここはどこだ、そうだ、公園だ。寝ぼけ眼をこすり、徐々に記憶が朧気に蘇ってくる。教師から説教を受けた後、何かの糸が切れたように、私は自棄になってしまったのだ。家を飛び出しあてもなく彷徨い、所謂ホームレスの仲間入りとなった。目が覚めたところで、何をする訳でもない。ただ、横になったまま、ぼうと地面を眺めていた。

蟻が歩いていた。餌を運んでいる。私は、何故だか蟻から目が離せなくなった。蟻は、餌をきちんと、整列して、巣穴へ運んでいく。穴に潜る寸前、蟻が動きを止め、私を振り返った。

笑った。

可笑しな話したが、その時蟻は笑ったように見えたのだ。どうやら、相当疲れているようだ、早く夢が見たい。早く夢を。

目が覚めると、学校の中庭にいた。昼休み長いこと寝ていたらしい。砂埃を払い、立ち上がろうとしたとき、黒い固まりが目に入った。よく見てみると、それは蟻の集団だった。死骸の小鳥を、巣に運んでいる。変に見入ってしまったが、わかればその程度の話だ。

早く行かなくては、次の時間は体育だ。遅れたら教師にどやされる。今日は確かクラス皆でサッカーだったか。

私は、小走りに、校舎に入った。

# 蟻地獄

作者 ペンギンペンギン

第四回 「俺的小説賞」 応募作品 61 掌編賞次点作品

この作品の著作権は全て作者に帰属します。  
無断転載は禁止しています。